

2022年

み言葉と歩む大齋節

～黙想の手引き／教役者お薦めの書籍・映画～



編集：北関東教区・東京教区 宣教協働特別委員会

<はじめに>

コロナ禍での三度目の大齋節がやってきました。今年は、降臨節に続き北関東教区・東京教区の教役者の皆様のご協力を得て、黙想のしおりを作成できました。心より感謝申し上げます。

黙想は神様との対話です。基本的に沈黙と祈りによってその時間を過ごします。最も大切なことは、神様のために自分の生活の時間をおささげし、心に神様をお迎えすることです。ありとあらゆることを神様に尋ねてみてください。さまざまな方法で、神様は必ず応えてくださいます。

できれば静かな場所や落ち着いた場所での黙想が望ましいですが、通勤通学の電車の中でも、歩きながらでも、お皿を洗いながらでも、また少し早く起きて朝の新鮮な空気を吸った後でも、もしくは寝る前の一時の中でも、他からの音ができるだけ遮られているような場面を見つけ、時間を神様におささげください。そして神様との対話をお楽しみください。

黙想のために大きな助けとなるのが聖書のみ言葉や信仰の先輩・信仰の友の思い巡らしを分かち合うことです。そのために、この「み言葉と歩む大齋節」冊子をぜひ用いてください。

<「み言葉と歩む大齋節」の使い方>

この冊子には、日付と聖書箇所と一言のメッセージ（黙想の手引き）が付いています。一度に全部読んでしまわず、日付通りに進めてみてください。

黙想の仕方の例：

- 最初に沈黙をもって始めます。神様を心の中にお迎えするための沈黙です。そのことを願って沈黙してください。
- 次にその日のみ言葉（聖書箇所）を読みます。
- しばらくみ言葉について思い巡らし、神様があなたに語りかけられていることに耳をすましてください。
- メッセージ（黙想の手引き）をお読みください。それぞれの教役者が、同じみ言葉を読んで与えられた思いや、黙想の手がかりなどを書いていきます。さらに深い黙想へと手助けしてくれるでしょう。
- 最後に、神様がこの時間に与えてくださったすべてのことを感謝し、短い沈黙の時を過ごします。主の祈りを唱えて終わるのも良い方法です。

毎日繰り返すことで、ご自分の生活が神様の声を聴くことを中心に整えられていきます。黙想にはトレーニングが必要です。神様を自分の心の中にお迎えするために、心を柔らかくし、耳を研ぎ澄まし、自分の心をかき乱す思いや雑音を少しずつ整理していきます。そして神様が入ってくださるスペースを少しずつ広くしていきます。

<ご注意：日々の聖書箇所について>

本冊子の日々のみ言葉は、テゼ共同体の「みことばの黙想」の聖書箇所に基づいています。「みことばの黙想」は、基本的に新共同訳を用いていますが、オリジナルのフランスのテゼで用いられる多言語朗読にあわせて、新共同訳から離れることがあります。したがって本冊子でも、曜日によってはその日の聖書箇所のエッセンスが一節にまとめられている日もあります。その一節だけを見ていただいても、聖書を開いてその日の聖書箇所全節をご覧になっても結構です。それぞれの良いように用いてください。

主のご復活の記念の祝いに向けて、自身の信仰生活をふり返り、神様によって力づけられ、良い準備の時を過ごして復活日を迎えることができますように。み言葉と共にこの大斎節を過ごして参りたいと存じます。

2022年大斎節

3月2日（水）大齋始日・灰の水曜日【マタイ6:1~6・16~18】

イエスは言われた。「断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。」

人間、人目が気になることがあります。あるいは、人から認められたい、褒められたいという願望があります。それ自体悪いことでも、間違っていることでもないでしょう。しかし、一方でそれだけが目的やゴールとなる時、何かもったいない気もします。なぜなら、自己満足止まりになりかねないからです。施しができる時、祈りを捧げられる時、断食をして食のありがたみを感じられる時、それは誰の、あるいは何のおかげで成し得るのかを思い巡らすことには大きな意味があるはずです。日に何度「おかげさまで」「ありがとう、感謝です」と言えることを振り返ったり、数えたりすることは、心の豊かさ、安定へとつながっていくのではないのでしょうか。

主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸

3月3日（木）【箴言 4:23】

何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある。

「自分の心を守れ」と言われると、つい自分の思いとか、心の健康とかと結びつけてしまいがちです。しかし旧約聖書では「心」は意思や感情、理性、命そのものを指す言葉でもあります。ここでは何によってその「心」を守るのか、ということが大切なのではないのでしょうか。神様の言葉、神様の知恵によって心を守る・決定づけるならば、命の在り方そのものが神様に向かっていくこととなります。自分を向きがちな心の頑なさを柔らかくし、神様の言葉に委ねて心の在り方を決定づける時、命そのものも新たにされていきます。それは1回限りの出来事ではなく、私たちは常にそれを保ち続けるようにと招かれているのだと思います。

聖職候補生 スザンナ中村真希

メモ

3月4日（金）【マタイ 11:2-11】

イエスは洗礼者ヨハネの弟子たちに言われた。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」

洗礼者ヨハネは死を前にして、イエスこそ来るべき方と思っていた自分の確信に疑いを持ちます。イエスの活動が、彼が思い描いているメシア像ではなかったからです。

イエスは自分の活動の内容を、イザヤ書を引用して、彼の弟子に伝えます。目の見えない人が見えるようになることは素晴らしいことですが、それは一人の人の上に起きた小さな出来事です。ヨハネにとって、それは世の終わりに神から遣わされたメシアがなすべきことではない、もっと大きな出来事を行うことがメシアの働きであるはずだと思っていたのでしょうか。しかしイエスにとって、そして神にとって、一人の人の上に起きる小さな出来事こそが、大きな大きな出来事なのです。

司祭 エレミヤ・パウロ木村直樹

3月5日（土）【1コリント 3:18-23】

パウロは記す。「一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。」

パウロはコリントで教会共同体を形成し、その地を去った後、信徒宛に手紙を書きました。それは、その教会の内部分裂の危機の話が伝わってきたからでした。その原因は、知恵の問題と信徒たちがキリスト者になりきれていないことからくるものと考えられます。

パウロはこう主張しています。この世の知恵に基づく生き方を捨てて、神の知恵を得て「愚かな者」に、つまり神の前にへりくだる者になりなさい。また、キリスト者はキリストのものであり、自分が自分のものではなく、そこに、本当の救いがある、と。

私たちの教会に内部分裂の危機はないでしょうか。私たちは、神の知恵を得て、キリスト者になりきれているでしょうか。

司祭 マルコ福田弘二

メモ

3月6日（日）【ルカ 4:1-13】

イエスは悪魔に答えられた。「こう書いてある。『人はパンだけで生きるものではない。』」

旧約の時代、イスラエルの拠り所は律法でした。律法によって神さまの思いを聞き、確かめることができました。主イエスさまが登場すると、人々の拠り所は大きく変わりました。律法を介さずとも、神さまの思いを主イエスさまが具体的に示してくださるからです。

霊に導かれて荒野に向かった主イエスさまは、出エジプトの苦難の旅をなぞるように律法の言葉によって悪魔の誘惑を退けられます。そしてご自分と神さまとの関係を問い直す試練として挑まれ、わたしたちにみ言葉にのみ寄り頼んで生きる模範を示してくださいました。わたしたちはこの神さまの思いそのもののキリストにたっぷり浸かって生きたいのです。

司祭 マリア・グレイス笹森田鶴

3月7日（月）【マタイ 18:1-10】

イエスは言われた。「これらの小さい者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」

当時の子どもは自分の全てを保護者に委ね、小さく低い存在と自覚して生きることで大人たちから守られた。委ねることは信じることであり、生きる上での希望でもあったろう。

イエスを受け入れることは希望を得ることを意味するが、躓かせるとは希望を奪い、生きることを諦めさせることに繋がる。子どもたちが人生に希望を抱き続けられる世界の実現は、誰にとっても夢のような神の国となり得るが、神の国の出現はイエスの教えを受け入れることから始まる。子どもを受け入れる人とは、子どもが抱えている思いを自分のモノとして捉えられる人のことだと言われているようで、それを見過ごすことの積み重ねが人を神から遠ざけ、神の国の出現をより困難にしている。

司祭 ダビデ倉澤一太郎

メモ

3月8日（火）【ルカ 6:12-19】

そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。

イエスさまは、大切な宣教の働きを始めるにあたり、ひとり山で夜を明かして祈られました。この祈りはイエスさまの宣教の旅に伴う12人の弟子をお選びになるため、その目的に適う「選び」は神さまのみ心によるもの。この世の価値観に囚われている私たちは、容姿・年齢・学歴などで人を判断しますが、神さまのみ心は、私たちの想像をはるかに超えたもの。しかし、この「選び」は私たちにも与えられています。自分の意志や時に関わらず起こる出会いや出来事が、気づかぬうちに私たちの人生を導きます。どうぞ「神の国」の働きを担う者として「選び」の中に生かされている恵みを感謝し、み心を求め、教会としての働きを共に担う者とされますように。

執事 ヒルダ藤田美土里

3月9日（水）【エフェソ 3:14-21】

どうか神が、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせてくださるよう。

『心の内にキリストを住まわせてくださるよう』という言葉から、イエスさまの御体と御血に与る陪餐を想起します。私たちは聖餐に与った後、イエスさまに従い、それぞれの生活の場所で福音を証しするために派遣されます。

この箇所は、イエスさまに従うことの原因力について書かれています。それは、神さまがその霊によって私たちの心に働きかけ、強めてくださることです。また、ここで言う信仰とは、先に働きかけてくださった神さまに応答することだと思えます。神さまによって強められている私たちは、応答することができます。このことを信頼し、神さまからの働きかけに応答することができますよう、聖霊の導きを祈り求めます。

執事 ミカエル・ヨシュア大山洋平

メモ

3月10日（木）【イザヤ 29:15-21】

主が来られるその日には、耳の聞こえない者が書物に書かれている言葉をすらすら聞き取り、盲人の目は暗黒と闇を解かれ、見えるようになる。苦しんでいた人々は喜び祝い、貧しい人々は喜び踊る。

自分の思い通りに物事を進めようと企てる者。言葉を嘲りに用い、人を貶めようとする者。イザヤが直面する「闇」は、何千年たっても変わらない人間の現実なのかもしれません。「苦しんでいる人は喜ぶだろう」という約束も、今苦しんでいる人にとっては空しく通り過ぎていくものとして聞こえるかもしれません。しかし、この「苦しんでいる人」は「へりくだる」あるいは「抑圧されている」をも意味します。「苦しみ」を神から離れていく理由とせず、神の前にへりくだってただ委ねること、そしてその苦しみをも神は用いて救いをもたらしてくださると信じることこそ、本当の喜び、心からの躍りにつながってゆくということなのかもしれません。

聖職候補生 スザンナ中村真希

3月11日（金）【ヨハネ 6:35-40】

イエスは言われた。「わたしが天から降（くだ）って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。」

ヨハネ6章はイエスが人々を食べさせるところから始まります。そして、35節ではご自分が命のパンであることを弟子たちに言い表します。「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」とイエスは断言します。教会はひたすらこの真実を全世界に宣べ伝えるために存在すると言っても過言ではありません。人間は様々なものによって満たされようとしませんが、神の子であるイエス・キリスト以外のものを通して人間は満たされないことをわたしたちは知っているのです。他のすべての神々や人間の求める物は一時的な快樂や安らぎを与えることはできても、イエスが与える永遠の命に通じることはありません。

司祭 ベレク キナ スミス

メモ

3月12日（土）【ヤコブ 1:5-8】

ヤコブは記す。「神は、だれにでも惜しみなく、とがめだてしないでお与えになります。」

コロナ禍の中、学校では様々な行事が延期や中止になりました。また、生活に困窮する人も多くなっています。フードバンクでの食料配布には女性や家族連れが多く来られます。

災害のような状況の中で何を選び取っていくのかが問われているのだと思いますが、さまざまな制限の中でベストのものを選択することが出来ないということもしばしばです。ヤコブ書は3章で知恵について血と肉に、そして、悪霊に属するものと、神様から与えられる上から知恵の二種類があることを語っています。

上からの知恵は神に求めることを通して与えられます。これはキリストに従う私たちに与えられている恵みです。働くことと同時に祈ることを忘れずにいたいと願います。

司祭 ジェームス須賀義和

3月13日（日）【ルカ 9:28-36】

イエスはペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちにイエスの顔の様子が変わった。雲が現れ、彼らを覆った。彼らが雲に包まれたので、弟子たちは恐れた。すると雲の中から声がした。「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け。」

イエスが3人の弟子を連れて山に登り、まばゆいばかりの姿に変えられた時、モーセとエリヤがあらわれた。モーセとエリヤが変容物語に登場した理由は、「律法という原点を示したモーセ」と「原点に立ち返ることを促したエリヤ」を通して、原点に変えられていくことこそを神が望んでおられると示すためである。そして「これはわたしの子。選ばれた者。これに聞け」という声を弟子たちは聞く。「神に愛されているイエスに従いなさい」という信仰の原点とも言えることを再確認する出来事であった。主の受難の前に位置づけられている主の変容は、わたしたちに信仰の原点を確認させ、また復活のキリストを預言し、信仰を強めさせる希望の福音である。

司祭 ステパノ卓 志雄

メモ

3月14日（月）【詩編 63】

神よ、わたしの魂はあなたを渇き求めます。あなたを待って、わたしのからだは渇き果てています。あなたの慈しみは命にもまさる恵み。

水や緑の豊かなところに住んでいると想像しにくいかもしれませんが、荒野の旅は過酷です。延々と続く荒野、持ち運ぶことのできる水はわずかで、のどの渇き、からだの渇きとの戦いと言えるかもしれません。渇くことは生きとし生けるものの命をおびやかします。

魂が荒野を旅しあるいは彷徨い渇き果てる時、からだの水を求めるとき、その魂は愛と慈しみを求めるでしょう。そして、わたしたちが神を探し求めて祈るとき、神は満ち足りるほどの慈しみと愛を注ぎ、わたしたちを助け、支えてくださいます。神の慈しみは、命を長らえることにもまさる恵みです。

執事 セシリア下条知加子

3月15日（火）【ルカ 4:42-44】

イエスは言われた。「わたしは神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ。」

私たちは主日礼拝にて『ルカによる福音書』を読み進めています。キーワードは「貧しさ」です。貧しさは、辛く苦しく寂しい、誰もが望まないものです。「飼い葉桶に寝ている乳飲み子」という最も貧しい姿でこの世に来られた主イエスは、人々の貧しさを見過ごしにできない方でした。人々を訪ね食事をし、貧しさを共にしつつ交わりを祝福する主イエスの存在こそが、喜びの知らせであり福音です。主イエスは「貧しい人々は、幸いである」と宣言された後、究極の貧しさである十字架を全うされます。十字架は、神によって必ず復活へと変えられます。貧しさを大切に、交わりの祝福を待ち望む信仰を神は良しとされ、本当の豊かさへ導かれるのです。

執事 バルナバ岸本 望

メモ

3月16日（水）【エフェソ 6:18-20】

どのような時にも、霊に助けられて祈り、すべての聖なる者たちのために根気よく祈り続けなさい。

私は聖書を読んで黙想するときに幸せを感じます。特に聖書の短い一節を覚えてお祈りしながら山を登る時間がいちばん幸せです。なぜなら、時々、聖霊に満たされている自分を感じるからです。走りながらも、おじぎをしながらも、聖霊に満ちている自分を感じたことがあります。たいてい体が苦しい時に感じました。その意味で聖餐式の中で、代祷の間立っているのは、少し苦しみながら切実な心で聖霊を呼んでいるのだと思いました。

司祭 ナタナエル池 星熙

3月17日（木）【1テサロニケ 2:1-12】

わたしたちは、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。

著者パウロは、福音を宣べ伝えた時のことを振り返っています。パウロの宣教には、苦しみが伴っていました。彼の行動を悪く思う人がいたからです。パウロ自身がフィリピで獄舎につながれていましたし、テサロニケではヤソンの家がユダヤ人に襲われています（使徒 17:5）。

手紙の受け手も、苦しみを共有していました。原因はパウロの宣教であるともいえます。パウロは、反省や後悔をしているのでしょうか。反省というよりも過去の宣教を吟味しているようにみえます。その結論として、人が吟味したり裁くのではなく、神が裁くことに慰めを見出しています。そして、改めて自分の行動の原理を再確認しています。全ては神様に喜ばれるためと。

司祭 ルカ平岡康弘

メモ

3月18日（金）【テトス 2:11-14】

イエス・キリストがわたしたちのために御自身を献げられたのは、わたしたちをあらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして清めるためだったのです。

この世界、この社会の中で肉体をもって生きている限り、押し寄せる波をうまく乗り切り、生き残る他、何もできないことがある。しかしずっとそれが続くと、先を見越して無駄を省き、多少人の道を外れても「生きるためには仕方がない」などと割り切りたくなる。でも一体、何のために生き残ろうとするのか。生き残ったその先には何があるのか。もし生き残り自体が目的になってしまうなら、そこには寒々とした心の荒野が広がっていることだろう。私たちの最終目標は、間違いをおかさない「良い子」になることではない。敬虔比べに勝つことでもない。神の示す希望を伝え、恵みの存在を伝え、そしてイエスご自身の生き方を伝える器になることではないか。

司祭 ロイス上田亜樹子

3月19日（土）聖ヨセフ日【ローマ 4:13-22】

パウロは記す。「アブラハムは、希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、多くの民の父となりました。」

アブラハムは、神の御心に従って息子イサクをもささげようとするほど、神を信頼して生き、その信仰に生きる中で、溢れる恵みを賜りました。あくまで想像ですが、パウロは聖書の中にアブラハムのこの信仰を再発見し、その信仰の光に照らされることで、解放されたのではないのでしょうか。信仰により、彼をがんじがらめにしていた律法が、神の愛の書に変えられたのです。そしてその開かれた眼差しで世界を見たとき、そこに救い主イエス・キリストがはっきりと目に映ったのです。少々想像がすぎたかもしれませんが、けれども、同じ書物が信仰との出会いにより全く異なるものとなるということは、わたしたちにも起こりうる信仰の真実ではないのでしょうか。

司祭 ヨセフ太田信三

メモ

3月20日（日）【出エジプト 3:1-15】

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしはくだって行き、彼らを救い出す。」（出エジプト記 3:7-8）

モーセは13節で、神さまに名前を尋ねています。「わたしはある」という名前が答えられます。古代社会の中で奴隷になった人たちは、神さまから見放され、そのような人たちの祈りに答える神さまはいないというのがその当時の常識だったと思われます。ところが、この神さまは答えられます。「わたしはある」と。本当におられる神さまは、人間の定めた制度や制約を超えて、その業をなされます。「叫びを聞き、痛みを知って」答えられる神さまの存在の片鱗が、人間の歴史の中に現れました。イスラエルの人達はこの後にも何度も国を失い、アイデンティティーの危機に陥りました。その度にここが思い起こされ、神さまに叫び、祈ったのだと思います。

司祭 シモン・ペテロ上田憲明

3月21日（月）【ヨハネ 3:22-30】

洗礼者ヨハネは言った。「わたしはメシアではない。わたしはあの方の前に遣わされた者だ。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けると、ヨハネの弟子として学びました。強烈なヤハウエ信仰、終わりの日の裁き、ユダヤ民族に染みついた選民思想の否定などをイエスはヨハネから受け継いでいます。そしてユダヤ全土から救いを求めてヨハネの許にやって来た人々をイエスはじっと見つめながら、ヨハネとは異なる新しい境地を切り開きます。ヨハネのように来る人を待つのではなく、自分から苦しむ人々がいるただ中に入って行き、その人たちの友となる生き方です。イエスの宣教が始まろうとする時、ヨハネはイエスを花嫁を迎える花婿にたとえ、自らを花婿の介添え人にたとえて、自分は喜びに満たされていると語ります。

司祭 マッテヤ大森明彦

メモ

3月22日（火）【出エジプト 13:17-22】

荒れ野で、主はその民に先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。

神様がイスラエルの民をエジプトから荒れ野へと導き出されたのは、約束の地カナンへと上るためでした。そして、本日の聖句は荒れ野においても神様がイスラエルの民と共にいてくださり、導いてくださったことを教えています。イスラエルの民が荒れ野を進む際、主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱を、夜は火の柱をもって彼らを導かれました。そのお陰で、イスラエルの民は昼も夜も進むことができました。聖書では、雲も火も神様の御臨在を表します。そして、イスラエルの民は雲の柱と火の柱に、神様の御臨在を見たからこそ、困難な荒れ野を進んで行くことができたのです。私たちも困難な時にこそ、神様の御臨在を信じながら歩みたいと思います。

司祭 マタイ金山昭夫

3月23日（水）【エレミヤ 12:1-3a】

エレミヤは言った。「主よ、あなたはわたしをご存知です。わたしを見て、あなたに対するわたしの心を究められました。」

神さまは私たち一人一人をご存じです。「だれも私をわかってくれない」と思う時でも、「神さまが見てくださる」と思えば慰めになります。では、私たちはエレミヤのように神さまに向かって「さあ、私を見てください」と言えるでしょうか。神さまは私たちのことをすでにご存じなのだから、今さら恥じたり、逃げたりする必要がないはずなのにコソコソしたい自分がいます。エレミヤの力強い信仰に比べると、自分の信仰がみすぼらしくみえます。神さまの前でさえ、自分を守るエゴという名の防御の鎧を脱ぐことが難しいのです。なぜ難しいのか。神さまはその理由や鎧を脱ぐ方法をご存じなので、私たちは神さまに聞かなければならないのです。

聖職候補生 セシリア高柳章江

メモ

3月24日（木）【1コリント 11:23-26】

パウロは記す。「わたしがあなたがたに伝えたことは、主から受けたものです。あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

イエスさまは私たちのために死に渡されました。イエスさまの死によって私たちは赦されました。私たちのいのちがつながったのです。私たちが教会でパンと杯を分かちあう時、イエスさまの死によって莫大な恵みを受けたことを確かめあいます。私たちはこの恵みを無条件でいただきました。私たちはいただいた時と同じように、差し出す時にも無条件でお渡ししているでしょうか。私たちはイエスさまに倣って生きていくものとして自分自身を他の人々のために用いていくべきことを記憶します。イエスさまは私たちのために犠牲となられたからです。私たちはパンと杯にあずかるごとにイエスさまの死を通してこのことを思い起こします。

司祭 パウロ中村 淳

3月25日（金）聖マリアへのみ告げの日【詩編 40:1-8】

いけにえも供え物もあなたは喜ばれず、私の耳を開いてくださった。供え物も清めのいけにえもあなたは求められなかった。そのとき、私は言いました。「御覧ください。私はきました。」

「神はいけにえも供え物も喜ばず、清めのいけにえも求めない」とうたうこの詩が、詩篇に収められていることに改めて驚く。ヘブライ語聖書の中で最も権威ある書物はトーラー（律法）であり、それは神の掟とみなされている。世界中のすべての宗教の神々同様、トーラーを与えた神もいけにえを要求する。しかしこの詩の作者は、いけにえを求める神に抗って、「いや、神はいけにえなんか喜ばないんだ！清めのいけにえなど求めていないんだ！」とうたう。この詩人に倣って、「正統な神についての語り」に挑戦し、想像力を働かせ、大胆に、自由に、神について語り直すことを学びたい。

司祭 ヨハネ塚田重太郎

メモ

3月26日（土）【詩編 30】

主よ、あなたはわたしの嘆きを踊りに変えてくださいました。わたしの魂はあなたをほめ歌い、口を閉ざしません。わたしの神よ、とこしえにあなたに感謝をささげます。

誰の人生にとっても喜びと幸せなことばかりではないでしょう。むしろ痛みと悲しみ、苦しみと嘆きが多いかもしれません。けれども私たちは、神様は前もって約束なさったように、いつも私たちと共におられ、また、私たちの痛みと悲しみ、苦しみを嘆きを喜びに変えてくださる、と信じて生きていけば、その信仰によって生きる力を得られます。人生は痛みと悲しみばかりであると思うようになったら、周りを見回してください。神様は、いつも私たちの人生の中に数え切れないほど恵みと喜びを与えてくださるのに、私たちが痛みと悲しみに^{はま}嵌り、それを気付かなかったかもしれません。庭の奥に密かに咲いている一輪の花がその徴かもしれません。神様は、平凡な日常の中にも生きる力になる何かを与えてくださいます。

司祭 シモン林 永寅

3月27日（日）【ルカ 15:11-32】

放蕩息子の兄に向かって父親はこう言った。「お前の弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」

主イエスは神の子でありながら、父の完全な反映であります。従って、この放蕩息子のたとえ話の中の「父」は迷った羊を絶えず求める主イエスを現します。迷った息子のために祝宴を開き、彼の罪を赦します。2000年前だけのことで決してありません。現在では、キリストが神を表すのと同じように、司祭職を通じて、主は懺悔しに帰る迷った人の罪を許して、聖餐式という祝宴へと誘います。いま、道に迷っていませんか？そうであるならば、司祭に連絡し、個人懺悔の予約をして、父の憐れみを知り、天国のお祝いを味わいませんか？

司祭 プラント・トーマス

メモ

3月28日（月）【詩編 62】

どのような時にも神に信頼し、御前に心を注ぎ出さない。

日々の中で神に信頼し、み前に心を注ぎだし、祈ることは、私たちに与えられている大きな力です。しかし苦しみがあまりに大きいと、呻く事しかできない時があります。義人ヨブでさえそうでした。限界を超えた苦しみの中でヨブは、以前のように「主は与え、主は奪う」とは言えず、呻き嘆き死をさえ渴望します。私達も呻く事しかできない時があるかもしれません。しかし神に向かって発する呻きは、神を信頼し注ぎ出す心でもあると思います。親を信頼している子は、悲しい時、泣きながら親の胸に飛び込んでいけます。神の子供である私達も、そのように神に向かっていいのです。神は私達の呻きや涙を、必ず受け止め、いつか、もう一度立ち上がらせてくださいます。

執事 マリア越智容子

3月29日（火）【知恵 2:23-3:1】

神は人間を不滅な者として創造し、御自分の本性の似姿として造られた。

わたしたちは、自分が「神の永遠性の似姿」（聖書協会共同訳）として造られたという「神の隠された意図」に気づいているといえるでしょうか。主イエスは、わたしたちに「父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることだからである」（ヨハネ 6：40）と神の隠れた意図を伝えてくださいました。わたしたちは子を見て信じる者であるでしょうか。主イエスの示してくださった永遠の命、「神の永遠性の似姿」を回復する道とは十字架への道、死に至る道です。自分の思い込みや正しさに死に、他者の語りかけ・働きかけに開かれているわたしたちであるでしょうか。

執事 ヤコブ荻原 充

メモ

3月30日（水）【詩編 36】

主よ、命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る。

本日のみ言葉の冒頭には「神に逆らう者」（新共同訳）とあります。祈禱書では「悪人」と記されております。「神に逆らう者」「悪人」とは誰なのか？ミャンマーでは軍が人々を迫害しています。人間は罪ある存在ゆえに誰でも「悪人」「神に逆らう者」となりえます。一方において人間は神の似姿として創られました。全ての人々が神に立ち帰り、ミャンマーに平和がきますように祈ります。

聖職候補生 ウイリアムズ藤田 誠

3月31日（木）【イザヤ 56:1-7】

主は言われる。「主のもとに集ってきた異邦人は言うな、『主は御自分の民とわたしを区別される』と。すべて主の名を愛し、その僕となる人々を、聖なるわたしの山に導く。そして彼らはわたしの家の喜びの祝いに連なる。」

ユダヤの人々は、自分たちを神に選ばれた民であると自認し、他の民族を異邦人と呼び、神を知らない人々と見下していました。

しかし神は宣言されます。「異邦人は言うな、『神は御自分の民とわたしを区別される』と」。神は、ユダヤ人と異邦人を区別しないとされます。なぜなら神は、すべての民、すべての人の神だからです。

日本において、何らかの信仰を持つ人、持たない人、さまざまです。聖書の神は、宗教を信じる人、信じない人、キリスト教徒とそれ以外の人にとっても、御自分が神であると宣言されます。すべての人が、神の子だということです。わたしたちの隣人、他の信仰に生きる人々も、神の愛する子どもなのです。

司祭 エレミヤ・パウロ木村直樹

メモ

4月1日（金）【詩編 139】

わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに、主よ、あなたはすべてを知っておられる。前からも後ろからもわたしを囲み、御手をわたしの上に置いていてくださる、その驚くべき知識はわたしを超え、あまりにも高く到達できない。

神様の不在を感じる時がある。日常での孤独や不安だけではなく、信仰の旅路において自分は神様からも忘れられてしまったのではないかと感じる時がある。しかし、近くになればなるほどその存在のことは見えなくなり、一つになればなるほど求めなくてもいいようになることもある。詩 139 編は神様のその神秘について歌ったと言えるが、5 世紀の聖パトリックはこのような告白を残した。「キリストは私と共におられる。私の中に、後ろに、前に、側におられて、私を助け、慰め、回復してくださる。キリストは私の下に、上におられ、静けさの中にも、危険の中にもおられる。私の愛する全ての人の心の中におられ、友や見知らぬ人の言葉の中にもおられる。」

司祭 ヨナ成 成鍾

4月2日（土）【箴言 4:18-27】

神に従う人の道は輝き出る光、進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。

神に従う人の道に光があり、神に逆らう人の道は闇に閉ざされると本日のみ言葉は私たちに語ります。キリスト教の歴史において多くの殉教者がいます。彼らは死後、キリストを証しする者とされました。彼らの歩んだ道は光へ通ずる道だったのでしょうか？また、キリストの受難の道に光はあったのでしょうか？直接、神や当事者からの応答は叶いません。しかし、私たちは殉教者の手記や周囲の証言を読み、史跡を見て回る、そして、祈ることを通してそのことを信じることができるのかもしれない。

聖職候補生 ウイリアムズ藤田 誠

メモ

4月3日（日）【ヨハネ 8:1-11】

イエスは女に言われた。「あなたを捕らえたあの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女はこたえた。「主よ、だれも。」イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

姦淫の女とされているこの女性は、究極の状況において死の報いを受けることを理解していたと思われる。この自らを審き、審かれて当然と思っていた彼女に、赦しの方からやってこられた。罪に定めることのおできになる方が「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。」と、言われた。「これからは、もう罪を犯してはならない。」は、禁止令ではなく、「あなたを罪に定められなかった神様のみ守りに入るように」と言われたのである。この見守りを体現する教会としての我々は、聖書にあるように互いに審く権限も赦す権限もあるのではなく、赦された者たちが互いに認め合い受け入れ合うことによって共に赦しの祝福を受けるのではなかろうか。

司祭 ヨハネ松浦 信

4月4日（月）【イザヤ 48:16-21】

喜びの声をもって告げ知らせよ。地の果てまで響かせよ。主はその僕を贖われたと。

この記事はバビロニアに長らく捕らえられていたユダヤ人が、ペルシャ王キュロスによってバビロニアが制圧されたため、捕囚から解放された際の出来事を指しています。バビロニア捕囚は後世の人々の研究によって、今日まで続くユダヤ教の性格に大きな影響を与えたとされています。神殿・祭司を中心とした宗教から、律法や律法学者を含んだより活動的な宗教へと変容しています。コロナウイルス感染に言わば囚われている私たちにとって、この制限・制約の多い、また個人が自律的に判断をしなければならない時代を、どのように生きていくかが問われているように思います。自らの生活を見直しながら、より困難な状況に置かれている方々を支えていければと思っています。

聖職候補生 ヤコブ高瀬祐二

メモ

4月5日（火）【1コリント 2:1-5】

パウロはコリントの信徒たちにこう書き送った。「わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、霊と力の証明によるものでした。それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためです。」

パウロがコリントの教会を訪ねた時…。自身で言っているように、「衰弱し、恐れに取りつかれ不安」の内にはありました。私たちが神様に会おう時、それは順調な時ばかりではありません。否、むしろパウロのように衰弱し恐れや不安の只中にある時にこそ、私たちは神様の存在を強く意識し求めるのではないのでしょうか。日常では神様以外の様々なものや事柄に心を捕らわれていたとしても、自分の脆弱さ惨めさに苛まれた時、もう^{すが}縋るものは神様しかないと気づくことを私たちは繰り返しながら生きています。そんな私たちに神様は御手を伸べ、十字架につけられたキリストの他、何も知るまい、知る必要は無いと信じさせて下さることに深く励まされます。

執事 クララ佐久間恵子

4月6日（水）【マタイ 8:5-17】

イエスは病人を皆いやされた。それは預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。」

ここでは、カファルナウムでの出来事が描かれ、ローマの百人隊長の子（新共同訳では僕）と、ペトロの家での姑と多くの悪霊に取りつかれた者や病人の癒しが語られます。しかし、いやしの出来事を奇跡としてほめたたえ、そこにとどまってしまおうわけではありません。神の癒しにあずかった人は、必ずとどまらずに進み、応答をするということでしょうか。それはキリストが伝える信仰を告白することであり、イエスをもてなすことへと昇華されてゆきます。

誰にとっても、キリストとの出会いは癒しであり奇跡であり、人生の患いと病が主に取り去られる瞬間でもあります。私たちの日々に、身も心も喜び踊るような解放の 때가備えられているのです。

司祭 フランシス下条裕章

メモ

4月7日（木）【マルコ 10:2-16】

イエスは言われた。「はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

福音書を読んで残念に思うことがあります。イエス・キリストの教えと働き以外のこと、すなわち日常的な様子についての記録があまりないということです。どんな食事をされたのか、何をして休まれたのか、どんな寝癖があったのか、声と目つきはどうだったのか、などのようなことが気になります。

でも、一つだけ、子供が好きだったことははっきり分かります。子供たちが遊んでいる様子に目を細くされ、もしかしたら交わって一緒に遊んだのかもかもしれません。まさにこのような人、他人を裁いて地獄に追い込むのではなく、些細なことにも喜び、どんな場合にも楽しめ、周りに良い空気を吹き込む人、神の国に入れる人はこのような人ではないでしょうか。

司祭 アモス金 大原

4月8日（金）【1コリント 10:12-13】

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練にあわせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

「逃れる道」は、試練からの逃げ道を想像させます。原語は「出口・脱出」という意味をもちます。神がご用意される道は、目の前の困難をただ避けるのではなく、困難から続く「出口」への道であるとの思いに至ります。その道を歩んだ心は芯をもつでしょう。なぜなら、試練の中で弱さを抱えるときに、出口への道が備えられ、ご一緒くださるお方がいる、その真実に出会うからです。

「逃れる道」は、独りからの出口。わたしたちはいつ、どのように独りにされてこなかったのでしょうか。

マーガレット・パワーズの詩『あしあと』が想起されます。

司祭 ダビデ斎藤 徹

メモ

4月9日（土）【2テモテ 1:6-11】

聖パウロはテモテにこう書き送った。「主を証しすることを恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」

私たちは信仰を保ち続けること、信仰を証しすること、信仰のゆえに行動することにおいて、勇気を必要とし、苦しみや不安を持つこともあり得る。パウロが同労者テモテに書き送ったこの聖句の言葉は、信仰を持つすべての者に、大きな励ましを与える。「主を証しすること」は、恥ではなく、すべての人の喜びとなる福音を、神の力に支えられて、信仰の同伴者と共に宣べ伝える姿そのものである。パウロはテモテにこの聖句の言葉を手紙で書き送ったが、その同じ手紙にはさらに励ましの言葉を綴った。「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。」

司祭 セラピム高橋 顕

4月10日（日）復活前主日【ゼカリヤ 9:9-10】

踊れ、歓呼の声を上げよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ろばに乗って来る。

復活前主日、わたしたちはロバに乗ってエルサレムに入城されるイエス様を想起します。イエス様はおそらく「ゼカリヤ書」のこの記述を想起されたのでしょう。「ゼカリヤ書」が示す新しい王は、「神に従う」（直訳は「正しい」）、「勝利を与えられた」（別訳で「救う」）、「高ぶらない」（身体・心・状態などが低・弱・貧の）方です。そのような方が真の王であり、真の平和をもたらすのです。しかし、「ゼカリヤ書」の著者も、ダビデ王が後継者ソロモンを雌のラバに乗せた物語を想起したのでしょう（王上 1:28～）。今年も真の王であるイエス様の姿を想起する時、時を超えて真の平和を求め続けておられる、主なる神様の愛を、心に刻みたいと思います。

司祭 バルナバ菅原裕治

メモ

4月11日（月）【黙示録 2:8-11】

主は言われる。「わたしは、あなたの苦難や貧しさを知っている。だが、本当はあなたは豊かなのだ。あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはいけない。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう。」

イエスが地上で過ごされた最後の一週間。十字架が迫り、ざわつく心を抱えながら、イエスはこのとき、何を想っていたらうか。神の御前に在ることから身を避けつつ、不忠実と罵られても、この苦難から逃げたい、命の冠なんか要らない、との想いと必死に闘っていたかもしれない。神を忌避するほどの苦しさ。けれど神はそのイエスの苦悩のすべてを知っておられた。神はイエスを一人にすることは決してなかった。神はイエスを見捨てなかった。そして、イエスは苦難を引き受けられた。イエスは神から命の冠を授けられた。だから今、わたしも苦難の中で決して一人ではないと信じることができる。

司祭 ニコラス中川英樹

4月12日（火）【マタイ 10:38-39】

イエスは言われた。「自分の命を得ようとする者はそれを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得る。」

聖週の頂点は十字架です。イエスは自分の命ではなく人の命のために十字架につかれました。その結果、多くの命が救われ、またイエス自身も高められました。まさに犠牲の何たるかを身をもって示されました。今日のイエスの言葉も、犠牲についての言葉です。犠牲の行為は、わたしたちの身近でいくらでもできるということを教えています。イエスの十字架は過去のことではなく、今のわたしたちもちょっと視点を変えれば、誰でもそれに倣うことができるわけです。犠牲の大原則は、主語は「わたし」ではなく「あなた」です。わたしたちは、今の社会にあって、どのような犠牲ができるか考えてみましょう。

司祭 ガブリエル西海雅彦

メモ

4月13日（水）【2コリント 5:13-17】

キリストはすべての人のために死んで下さいました。それは、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活して下さった方のために生きるためです。

「すべての人のために」に主が死んでくださったのであれば、“こんな私”のためにも、主は死んでくださったのでしょうか。“こんな私”に、主が命をかけてくださるなんて、私にそんな価値はありません。では、主は、私が嫌いな人のためにも、苦手な人、受け入れがたい人、ゆるし難い人のためにも、死んでくださったというのですか。その人たちのために、主が命をかけてくださるなんて…、と思いかけて、ああ、私は自分の傲慢さに苦しくなりました。今日は、「私」のことばかりで一喜一憂して、生き延びようとするのではなく、主が命がけで、徹底的に関わっておられる「だれか」（他者）のために、祈りながら生きられたら、と思います。

司祭 パウロ宮崎 光

4月14日（木）聖木曜日【ヨハネ 13:31-35】

イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

聖木曜日、弟子たちと1日を過ごされたイエス様は夕方、マルコの家の上階の広間で最後の食事をなさいます。一同が食事をしている時、イエス様はパンを取り、感謝して「これは私の体である」とお与えになりました。食事の後にぶどう酒の杯を取り、感謝して「皆この杯から飲みなさい。これは罪の赦しのための約束の血である」と言われました。

私たちはイエス様の命を霊の糧として取り入れ、生かされているのを学びます。この日イエス様は、世のすべての人を最後まで愛しぬかれたと、福音記者使徒聖ヨハネは私たちに語っています。

命をささげて私たちに永遠の命を与え、神の国へ迎えてくださるイエス様の愛を思いつつ、本日を共に過ごしましょう。

司祭 パウロ鈴木伸明

メモ

4月15日（金）聖金曜日・受苦日【エフェソ 2:13-18】

キリストはわたしたちの平和です。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊しました。

キリストはこの世界の和解と平和のためにご自身の血を、また肉を差し出してくださいました。神とわたしたちとの和解のため、またわたしたちの間にある敵意を滅ぼすため、命をささげてくださいました。

十字架上のぼろぼろでみじめで、そして息荒く血と涙と泥にまみれたお姿は、わたしたちを平和と和解へと導くお姿です。争いと分裂の罪にまみれているわたしたちを、救い出そうとしてくださっている苦悶のお姿です。この姿によってでしかわたしたちは真の平和と和解にはたどり着けないことを示す、無力で無防備なお姿です。わたしたちの目の前の十字架上のキリストは、わたしたちのために命を差し出してくださいました。

司祭 マリア・グレイス笹森田鶴

4月16日（土）聖土曜日【ローマ 6:3-11】

パウロは記す。「わたしたちは、洗礼によってキリストと共に葬られました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためです。」

洗礼を受けた時の、頭に注がれた水の冷たさと、額に印された十字の感触を思い起こします。神から与えられる私たちの恵みはすべて、イエス様の十字架と復活の出来事にその泉を持っています。私たちには、弱さと躓き、苦難と死は、栄光と復活の命につながっているという希望が与えられています。洗礼式の中で誓った、キリストを主と信じて従い、生涯その模範にならうことを努める、イエス様と共に歩む新しい命を私たちは生きています。神と人を愛し、主イエス・キリストのなさったこと、語られたことを、私たちの行為と言葉として生きることができるよう。

司祭 パウロ矢萩栄司

メモ

4月17日（日）復活日【ルカ 24:1-8】

女たちは、空の墓のそばで輝く衣を着た二人の人に会った。女たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。」

今から15年ほど前、「千の風になって」というタイトルの歌が一世を風靡しました。その第二番は「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません、死んでなんかいません」という歌詞で始まります。イエス様のよみがえりの場面を福音書を通して見聞きする度に、あの歌が世に出て以来この歌詞が浮かびます。あの日も、人びとはイエス様の亡骸が納められ、封印されているお墓にしか意識は向けられていなかったことでしょう。お墓という今は亡き、過去の人々の亡骸を納める所は、すなわち全てのお終い、いのちの終焉に向いていましたが、それが根底から覆されました。それは、「今」そして「これから」への神様の霊の働き、導きによる大どんでん返しの始まりでした。

主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸

メモ

【教役者お薦めの映画】

主教 高橋宏幸

題名 「ブラザー・サン・シスター・ムーン」

監督：フランコ・ゼフィレツリ

アシジのフランシスコをモデルとした、有名な映画です。戦いから帰るや熱病に侵されて生死の間をさまよった後、小鳥の声に目を覚まします。そして、遂に大回心が起こり、修道生活を始めます。キリストに倣う貧しさ、自然との関わり、奉仕の姿等々、信仰とその原点を顧みるヒントがちりばめられている作品です。音楽も美しさにも心を打たれます。

司祭 ベレク・スミス

題名 「牛久」 映画ホームページ <https://www.ushikufilm.com/>

監督：トーマス・アッシュ

茨城県牛久市にある“東日本入国管理センター”で隠しカメラによって撮影されたドキュメンタリーです。在留資格なく日本に滞在し難民申請をしている人々は、刑務所のような収容施設で長期に亘り引き止められ、残酷な状況のなかにいます。そのようなことが近くで起きていても、日本の人々はそれを見聞きすることがないのです。

司祭 斎藤 徹

題名 「最後の誘惑」(1988年)「The Last Temptation of Christ」(原題)

原作：ニコス・カザンザキス 監督：マーティン・スコセッシ

原作も映画も公開当時、聖書から逸脱しているとしてキリスト教界からはかなり問題視されました。好みは大きく分かれると思います。私は、「創作品」として観て深く考えさせられました。人としてのイエス、神としてのキリスト、そしてイエス・キリストの十字架について、思い巡らせた作品です。

聖職候補生 藤田 誠

題名「沈黙—サイレンス」(2016年)

原作：遠藤周作 監督：マーティン・スコセッシ

17世紀、江戸時代初期のキリシタン弾圧下、宣教師と民衆の信仰が描かれた作品。自らの力ではどうすることもできない抑圧下、キリスト者の祈りの持つ意味とは？と考えさせられる作品。キリストの十字架への道行きと重ねて見ることができます。

司祭 大森明彦

題名「クワイ河に虹をかけた男」(2016年) 監督：満田康弘

第二次世界大戦中「泰緬鉄道」の建設に連合軍捕虜が動員され、多くの犠牲者を出しました。永瀬隆さん(旧陸軍通訳 2011年逝去)は1964年からタイへの巡礼を始め、贖罪と和解の旅を重ねます。20年にわたる取材をもとに編集された映像は感動的です。永瀬さんは英連邦戦没捕虜追悼礼拝の呼びかけ人でもあります。

司祭 プラント・トーマス

題名「ブレードランナー」

「レプリカント」というサイボーグたちは人間になりたがっているが、実はすでに人間よりも人間らしい。映画の中では、人間が感情を抑えているのに対し、短命のサイボーグは人生への欲望に満ちている。彼らのリーダーは死ぬとき、自分を追っている警官の命を救う。人間性の価値を分かるために、非人間なものが必要なのか？

司祭 上田亜樹子

題名「最後の誘惑」

1980年代の話題作。イエスのあの「人生」が、家内工業的に逃れようのない圧の中での「神の息子」であったのか？という問いを感じさせる。

題名「CRY FREEDOM」

ツツ主教の逝去を記念して。

あのような社会の中で、霊的指導者として、宗教指導者として、誤解を恐れずに言えば社会活動家として生きることの困難を想像させる。

執事 越智容子

題名「道」 監督：フェデリコ・フェリーニ

ジェルソミーナの眼差しの中に、イエス様の眼差しを感じる映画。フェリーニは「神の愛は信じぬ者にも及ぶ」という思いを込め、この映画を作ったそうです。映像も台詞も音楽も深く心に響きます。

題名「独裁者」 監督・主演：チャールズ・チャップリン

チャップリンが「ヒトラーという男は笑いものにしてやらなければならない」と、命がけで作った映画。笑い、涙、勇気と愛と希望が届きます。チャップリンは幼い頃、精神疾患を持つ母が、貧民街の部屋で、泣きながら演じてくれた聖書の十字架のシーンを見た時に、「愛」というものが心に灯されたと自伝に記しています。

執事 藤田美土里

題名「リスペクト」(2021年アメリカ) 監督：リーズル・トミー

ソウルの女王、アレサ・フランクリンの映画。「彼女の声の裏側には、たくさんの歴史と物語がある。」共に働いたプロデューサーの言葉通り、彼女の人生は人種差別や男女平等運動が巻き起こった時代と共にあった。公民権運動の指導者キング牧師のもとへも駆けつけた。歌に込められた彼女の叫びが、激動の時代に人々を励ました。

司祭 宮崎 光

題名「ディアボロス・悪魔の扉」(1997年アメリカ映画)

監督：テイラー・ハックフォード

主演：アル・パチーノ キアヌ・リーヴス

裁判では負け知らずの若手弁護士が、その手腕を高く評価されてゆく中で、「勝つこと」(結果を出すこと)と「正しいこと」(正義を行うこと)に葛藤する、現代の「悪魔の誘惑」物語。悪魔は「虚栄心」や「驕り高ぶり」に素早く巢食う、というスリルを観る者に刻み込みます。褒められたら気持ちイイけれど、悪魔はそこに？

司祭 金山昭夫

題名「Brother Sun Sister Moon」 監督：フランコ・ゼフィレツリ

フランコ・ゼフィレツリ監督がアッシジの聖フランチェスコの半生を描いた映画。ドノヴァンが書き下ろした主題歌と挿入曲が映画をさらに引き立たせている。

「聖書に忠実に生きる」というシンプルかつ困難な問題は今でも色褪せることのない永遠のテーマである。

執事 岸本 望

題名「パッション」 監督：メル・ギブソン

キリストの受難と十字架刑をリアルに描いています。セリフは全編アラム語とラテン語であり、吹替版はありません。私たちの日本語による受難のイメージが覆されます。登場人物の激しい息遣いによって、観る者は受難劇に引き込まれます。聖書の記述そのままに残酷さが表現されており、PG-12の指定がなされています。

司祭 塚田重太郎

題名「天使にラブ・ソングを」

原題はSister Act(洋画につける意味不明な日本語タイトルやめて欲しい)。次々と若い人が加えられて、それを見て喜ぶお年寄りが沢山いる、活気に満ちた教会への憧れを呼び起こしてくれる。

司祭 木村直樹

題名「あん」 原作：ドリアン助川 出版：ポプラ社

教会はハンセン病患者救済活動を行ってきました。しかし救済対象とされた患者一人ひとりの人生に焦点が当てられることはありませんでした。「らい予防法」が廃止されても、回復者の社会復帰は困難であり、この偏見の強さについて、この映画は語りかけています。教会が戦うべきものが何であるかが明らかにされている映画です。

【教役者お薦めの図書】

司祭 倉澤一太郎

題名「遺跡が語る聖書の世界」 作者：長谷川修一

遺跡そのものだけでなく、パンやワイン、オリーブ等の生活必需品や当時の人びとにとって大切にされた音楽についても語られ、聖書世界がより身近に感じられるようになります。『福音と世界』の連載記事であったので読み易く理解し易い上に、何より楽しんで読むことが出来るのがおススメのポイントです。

司祭 鈴木伸明

題名「塩狩峠」 作者：三浦綾子

50年前、私が中学3年生の時に映画化もされた、実話に基づく長編小説です。名寄から旭川方面へ向って塩狩峠を登っていた汽車の最後尾車両の連結が外れ、暴走した時に、乗り合わせていた主人公が自分の身を投げて客車を止め、命をささげて乗客を救った物語です
「主よ御心のままに」の意味を根本から考えさせられる物語です。

司祭 高橋 顕

題名「聖書入門」 作者：フィリップ・セリエ

支倉崇晴・支倉寿子 訳 講談社選書メチエ

聖書の言葉、人物、物語、内容、風物は、私たちの様々な文化や生活に現れる。文学、絵画、音楽、映画、諺、季節行事など、聖書やキリスト教の影響ははかり知れない。このフィリップ・セリエの『聖書入門』はこの影響について解説する本である。興味深く一気に読み進められる本だが、同時に聖書の理解がさらに深まる。

司祭 矢萩栄司

題名「目はかすまず気力は失せず」 作者：関田寛雄

93歳にして日本基督教団の現役の巡回教師として今も奉仕を続ける著者の、牧会者、説教者、神学者、教育者としての講演、論考、説教を収録した最新刊。師の福音の証し人としての生涯の集大成とも言える、福音の核心を余すところなく伝える一冊です。

司祭 太田信三

題名「ワイトゲンシュタイン・文法・神」

作者：アラン・キートリー著、星川啓慈訳

『私でもスパイスカレー作れました！』（こいしゆうか、印度カリ子著）と迷いましたが、今読み進めている本書に。「靈魂不滅を信じる者が営む言語ゲームは、それを否定する者が営む言語ゲームとは異質だ」の一文に、学生時代ワイトゲンシュタインに触れ、全然分からないながらも強く惹かれた理由を得た気がしています。

司祭 大森明彦

題名「茶の湯とイエズス会宣教師—中世の異文化交流」

作者：スムットニー祐美 思文閣出版（2016年）

BSA 叢書『聖書の心と茶の心』を読んだ方から、ご興味があればと声をかけられこの書籍をお借りしました。博士論文がベースになっているので、かなり専門的ですが、キリシタン時代に興味がある方にはお勧めです。著者はアメリカ第7艦隊の職員でもあり、茶の湯が開く異文化交流が今でも生きていることを感じさせられます。

執事 藤田美土里

題名『神を追いこさない』-キリスト教的ヴィパッサナー瞑想のすすめ-

作者：柳田敏洋

マインドフルネス瞑想の入門書。「瞑想」と「黙想」の厳密な違いをキリスト教事典では定義づけていないが、精神を集中することと思いを巡らせることとの違いは大きいとも聞く。お勧めを受け初めて瞑想を体験したが、今この時に与えられた神の恵みへの感謝の思いに溢れる経験となった。日々神の愛に気付かされる豊かな時間を。

司祭 平岡康弘

題名「サピエンス全史(上)文明の構造と人類の幸福」

作者：ユヴァル・ノア・ハラリ

著者は、人間とアリやチンパンジーとの注目すべき違いは、大勢で柔軟に協力する能力にあると主張します。アリも協働するが近親者としかうまくいかない。人間が赤の他人と協力できるのは、「共通の神話を信じる」能力にあると説明しています。人類史における「信じる能力」について新しい知識を得られると思います。

聖職候補生 高柳章江

題名「新美南吉童話集」 作者：新美南吉（千葉俊二編）

岩波文庫で童話を読む。暖かい、きれいな絵はないけれど、その分、登場人物の思いが透ける。子狐がさしだした白銅貨をカチあわせてみる帽子屋、ちょっと前に売った胡弓を買い戻そうとした男に倍の値を言い渡した女主人など。どの人も「生きているんだなあ」と思わせる。心にしみる話に終わらない、人間くさい話の数々。

司祭 福田弘二

題名「愛への道～十字架の聖ヨハネの生涯と教え～」

作者：カルメル修道会・編 聖母文庫 聖母の騎士社

十字架の聖ヨハネは、16世紀、スペインのカルメル会の修道司祭、聖人であり、35人しかいない教会博士の一人でもあります。この本は、彼の生涯と教えのエッセンスを分かりやすくハンディにまとめた文庫です。深い靈性に富む言葉が、キリストの足跡に従って歩む道を指し示します。

<p>司祭 菅原裕治</p> <p>題名「バラバ」 作者：P. ラーゲルクヴィスト</p> <p>この時期定番すぎるかもしれませんが。また、ご自宅のどこかにずっと置かれたままかもしれません。しかし、改めて読むと、主なる神様の愛が、心に染みます。</p>
<p>執事 大山洋平</p> <p>題名「迷子の魂」 文：オルガ・トカルチュク</p> <p>絵：ヨアンナ・コンセホ 訳：小椋彩(おぐら ひかる)</p> <p>本書は、主人公のヤンが忙しく働く間に離れてしまった迷子の魂が、ヤンに追いつくまでのことをほぼ絵だけで表現している絵本です。黙想をするように、自分の魂は迷子になっていないか、大切なものを見失っていないか、1頁、1頁ゆっくりと読むことをお勧めします。</p>
<p>司祭 宮崎 光</p> <p>題名「傷は希望へのしるし」 作者：平林冬樹</p> <p>イエズス会神父による、苦しみを喜びに変えるための八日間の黙想の手引き。「希望が断たれたときこそ神と出会い、信仰に辿り着く、これこそが信仰の神髄、急所」と著者は述べ、「黙想は、神が私とともに過ごしてくださる、水入らずのひと時」（本書12頁）として、確かな希望と深い喜びへといざなわれる本です。</p>
<p>聖職候補生 中村真希</p> <p>題名「7 SEEDS」 作者：田村由美</p> <p>悩みましたが昨年同様田村由美の漫画『7 SEEDS』をお勧めします。「SF サバイバルストーリー」との事ですが、人とは、命とは、生きることとは何だろうと考えさせられる、色んな人間のドラマが描かれています。</p> <p>それと「ドラえもんのび太の宇宙小戦争」が今年リメイクという事ですが、是非85年版も。武田鉄矢の歌が泣けます。</p>

【お薦めのポッドキャスト】

<p>司祭 上田憲明</p> <p>題名「Harry Potter and the Sacred Text」 (https://www.harrypottersacredtext.com/)</p> <p>作者 Not Sorry Production</p>
<p>ハーバード大学の神学大学院卒業のキャスパーとヴェネッサがハリー・ポッターの物語を、聖書を読み黙想する方法を用いて、ハリーポッターの物語を丁寧に深く読んで、自分たちの人生や社会の中で黙想したことを語っています。「フィクションを読むのはこの世を抜け出すのではなく、この世を生きるのを助けてくれる」</p>

※この冊子は東京教区ホームページでもご覧いただくことができます。

※「日本聖公会東京教区お知らせLINE」のご案内
東京教区からのお知らせをタイムリーにお届けします。
また、今後は北関東教区との宣教協働についての情報もお送りする予定です。
右のQRコードよりご登録ください。



「2022年 み言葉と歩む大斎節」
発行日 2022年2月17日
発行者 日本聖公会 北関東教区
日本聖公会 東京教区
表紙イラスト：樽谷 雪（東京教区 東京諸聖徒教会）
編集：東日本宣教協働区 北関東・東京教区分科会
北関東教区・東京教区 宣教協働特別委員会
問い合わせ先：東京教区事務所
〒105-0011 東京都港区芝公園 3-6-18
電話：03-3433-0987